

私は今、幼児開発協会の仕事にも関係していますが、この協会は、ソニーの井深大氏が、鈴木鎮一先生門下の幼児たちが余りにも見事にヴァイオリンを演奏するのに感激され、幼児の能力の偉大さと、この時期の教育の重要性に気づかれたのが動機で設立されたものです。

昭和 44 年、財団法人として認可されたばかりですが、すでに大田区に新築されたビルに幼児開発センターが開設され、幼児教育のための運動と実践が開始されました。

家庭の若いお母様方向けに、機関誌“幼児開発”が発行されていますが、これは有益な本ですから、本誌の読者の皆様にもお奨めしたいと思います。

漢字教育の実践例

さて、このセンターで、先日、会員の方々といろいろお話をした際に、大変おもしろいお話をうかがいました。それは、都内で開業医をなさっている方ですが、もうすでに何人ものお子様を育て上げられ、医院の方は御長男にお任せになっていらっしゃる方です。

この方のお子様の教育が、すべて「幼児期からの漢字教育」だったのです。それは正に石井方式以前の石井方式、漢字教育だったの

です。小学校に入学しないうちから、漢文まですらすら読めるほどに、“読む”教育を徹底的になさったそうです。

だから、小学校に入学してからも、読書欲が旺盛で、程度の高い書物にどんどんと食いつき、知識は幅広く深いものになっていったのです。

しかし、学校の成績は必ずしもそれに伴わなかったそうです。今の五点評価で言えば、三か、せいぜい四がいくつか混じる程度で、クラスでは中、あるいは中の上といったところだったということです。けれども、学校の成績には頓着せずに、好きな読書を自由に伸ばすことの方に気を配られたそうです。つまり、家庭では、学校の勉強の復習よりも、自由な幅広い読書の方を重んじたのです。

すると、中学、高校と上級に進むにつれて学校の成績も上位に自然に移って行ったそうです。もちろん、学校の勉強に特別に力を入れるようにしたわけではありませんのに、次第に上位に移って行ったのです。そして、皆さんそろって東大を卒業されたのです。

読書能力と学校の成績

昔から、「本立って道生ず」と言われているように、基礎が固まりますと、あとは自然に着実な発展を遂げて、最初は回り遠いように見え

ますが、結局はそれが成功の最短距離を歩んでいることがわかります。

このお医者さんのお子様にとられた教育法は、学問の基礎である“読書の能力”を養うことこそ、成功の最短距離であるとお考えになったところにあり、しかも、そのことをりっぱに実証なさったものだと思います。

ただここで、着目していただきたいことは、幼児期に読書能力が高くなったと言っても、それがすぐに学校の成績に影響するとは限らない、ということです。

多くの場合は、読書の効果は学校の成績にすぐにつながらないのが普通です。なぜなら学校で得た知識だけの子どもは、一本道を進むようなもので、迷いなく正答にぶつかることができますが、広い読書によって豊かな知識が身につけている子どもは、いくつもの道が見えますので、それを一々検討して容易に正答に達することができないからです。

しかし、それだけに、普通の子どもよりも一層判断のために頭をよく使いますので、頭の働きはますます良くなっていき、最後の成功をつかみ取るわけです。

速効型の教育は避けよう

だから、教育というものは、目先にとらわれずに長い目で見るのが大切なのです。

ところが、世のお母様方の多くはせっかちで、速効を望みます。しかし、教育には速効はほんの一時しのぎか外見を良くするかに過ぎません。

たとえば、“知能訓練”と称して、知能テストまがいのことを練習させているところがありますが、その結果確かに知能テストの成績が良くなり、IQ(知能指数)が上がります。しかし、IQは言わば寒暖計の目盛りですから、寒暖計に息を吹きかけて目盛りが上がったから暖かくなったと喜ぶようなもので、IQの向上が知能の向上そのものではないことを知るならば、このような訓練がいかにつまらぬものであるか、わかっていただけたと思います。

結局、速効的な効果のある教育法は、うまくいっても一時的に学校の成績を向上させるだけで、多くは有害と見た方が無難です。それよりは、先のお医者様のように、学校の成績にこだわらず、真の能力を養うことに努力すべきです。

しかし、このことは決してやさしいことではありません。つい目先の成績に一喜一憂するのが人情です。だが、この人情に流されてはいけないのです。